

(国語科)

**豊かに学ぶ子どもを育てる
～読む能力の高まりを目指して～**

大阪市立豊里小学校 中西康恵 尾小谷純也

1. 研究主題設定の理由

本校の教育目標は、「豊かな人間性とたくましく生きる力を育てる教育実践を推進する」としている。

校訓として「ねばり強い子・よく考える子・明るい子」とし、さらに、具体的方策として、「わかる」「できる」「楽しい」授業の創造に向け、主体的に学習に取り組み、生涯にわたって学び続けることのできる児童を「豊かに学ぶ子」と考え、授業力向上にむけて研究に当たることとした。

本校では、研究教科を昨年度より国語科とした。国語科で培われる言葉の力は、各教科で言語活動を充実させるために基礎的基本的な技能として大切となる。そこで、まず、言語活動を通して、児童の興味・関心をてこに、児童が意欲をもって主体的に取り組める単元設定の工夫を行った。そして、主体的取り組みの中で、目的に応じて情報を読み、そこで得た知識や技能を生かし、表現してみることで、学んだ言葉の力が必要な場面で活用できるように考えた。そのようにして自分の学びを実感することは、学習したことへの自信にもつながる。また、このような経験の積み重ねが、学び続けるために必要な言葉の力を育てていくことになると考え、これらの理由により、本主題を設定した。

2. 研究の概要

今年度は、「C読むこと」の説明的文章を重点教材とした。そして、定着させたい知識や技能を明らかにするため、学習指導要領の指導事項を踏まえ、年間を通しての低・中・高学年の目標を設定した。その上で、以下の視点を定め、研究を進めた。

(1) 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

単元を構想するにあたっては、教材文分析と児童に付けたい力とを勘案し、児童の興味・関心を引き付けられるような言語活動となるよう工夫した。言語活動では、教材文を読むことで得た基礎的・基本的な知識・技能を基に、それらを活用して表現活動へと展開していくようにした。また、学習活動を通してどのような言葉の力を学ぶのか、児童自身も課題としてつかめるようにした。このように、読み進めるうえで目的意識を持ち、課題解決に向けて意欲的に学習に取り組めるような単元構成となるよう工夫した。

(2) 基礎的基本的な知識・技能の習得

・学習環境の整備

「声のものさし」、姿勢、話すこと・聞くことの約束、ハンドサイン、話型を全校で統一して作成し、掲示した。また、学習した基礎的基本的な知識や技能について、読むことに関わる主な内容を掲示し、必要なときに振り返ることができるようにした。

さらに、児童が日常的に、本に親しむことができるよう、当該学年の国語科の教科書に取り上げられている本を中心に学年に応じた本を選び、各教室近くにブックトラックを利用して常置した。

・意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

児童が自分の考えとの違いや読み方の違いに気づくとともに、必要な情報を取り出し、自分の考えを広げていくことができるよう、交流の形態を児童の実態や学習場面

に応じて、適切に設定した。そして、それぞれの意見交流の良さを考慮し、効果的に1時間の学習の中へ取り入れていくようにした。交流が有意なものとなるためには、自分の考えをもてることが大切となる。そのために、ワークシートやシンキングツールなどの指導材の工夫にも取り組むことにした。

・ **学習課題を基にして自ら学びを振り返られるような評価の工夫**

学習活動中での評価のあり方を工夫することにより、子どもたちそれぞれが、その時間の学習課題を意識できるようにしていった。そして、課題を達成できたかどうか自己評価することにより、次の学習に向けた自己の課題も意識されるものと考えた。また、友達と相互評価し合い、互いの良さや足りない点に気づくことで、互いに学び合う態度を育てると共に学習の達成感や充実感を味わえるようにした。

(3) 図書の計画的な活用

多読にひらく活動を単元計画の中に位置付け、どのような図書が効果的なのかを把握し、図書の計画的な活用を図った。朝の「読書タイム」の設定や「自動車文庫」の利用、学年毎の関連図書の配置など、常に児童が本に親しめるような場作りを行った。さらに、地域や保護者と連携した読み聞かせ「絵本ばたけ」や、図書委員会の児童による絵本や紙芝居の読み聞かせを行い、本に親しむ機会を増やしていくようにした。

3. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 教材の特性と児童につけたい力を基に、児童の興味・関心を引き付けられるような言語活動となるよう工夫することにより、目的意識をもって教材文を読み、課題解決に向けて意欲的に学習に取り組めた。
- ハンドサイン、話型などを全校で統一することにより、話し合いに抵抗なく参加することができた。また、活発な意見交流につながった。その過程で自他の意見の共通点や相違点に気づきやすくなった。
- シンキングツールの活用により、文章の順序や構成、読み取った情報の分類、関連付けなどし、自分の考えを「見える化」することができた。その結果、自信をもって自分の考えを表出することができた。
- 常に本文に戻って考えるようにすることで、児童は、本文の言葉をじっくりと読み、内容を共有することができた。そのとき、本文の言葉を根拠とし、理由をつけて考えを述べるできるようになってきた。
- 自己評価の低い児童に対しては、個別に指導をするなど、指導の手掛かりとして用いることができた。また、個別に声掛けをすることにより、自己評価がよくなってきた児童は、より意欲的に学習に取り組むことができた。
- 図書の計画的な活用を通して、児童が本に囲まれて生活できるようにした。これにより、児童が気軽に本を手にとって読むことができるようになった。

(2) 今後の課題

- 図書が計画的に活用できるよう、各学年で計画を立てたが、児童にとって扱いにくい図書もあったので、どのような本を、どう読ませていくのかという点について、さらに、検討していく必要がある。
- シンキングツールを、他の教科や他の単元などでも活用できるように、有効な活用の場や方法の開発に取り組んでいく。